

## 日本語に関する主題の省略と非省略

曾 儀 婷

### 1. はじめに

日本語の主題はよく省略される。これまで、主題の省略と非省略に関する研究も多くなされてきた。しかし、主題の省略に関する研究が比較的多く、主題の非省略に関する研究は、概して蓄積が少ない。そこで、まず第一に、本稿の視点として、主題の非省略性に光を当てたい。

次に、そもそも、これまで主題の省略・非省略の研究において、主題になる要素が区別されてなかった。つまり、これまで人称代名詞がひとつのジャンルとして扱われたことがなかったこと、人称代名詞を、主題になる要素として、独立して扱われてこなかったことを問題視し、本稿では、主題の省略・非省略に関して人称代名詞を対象としたい。すなわち、人称代名詞を独立した一つのカテゴリーとして注目し、その分析を試みたいのである。

日本語学習者の人称代名詞の使用については、その使用過多がこれまで指摘されてきた。村上(1996)は、日本人の日本語の文章および会話では、一人称の主語が多く省略されるが、日本語学習者は、一人称代名詞の「私」を過多使用するという結果を報告している。

日本語の一人称代名詞はよく省略されると言われているが、一般的に新しい話題が導入される時は、それが誰のことかはっきりさせるために使用されるものである。しかし、一つの文においては一人称代名詞が文の「成分」として機能しているために、主題や目的語になる場合がある。そこで、本研究では、一人称代名詞が「主題」として使用される場合に絞って検討する。これが第三の点である。ここでは、その主題の位置に使用される人称代名詞を「主題の機能を持つ一人称代名詞」と名付けておく。

第四に、現時点では、小説を分析対象とする研究が多く、日本語学習者が日本語を習得する際に使用するテキストと、文体や文の構築手法などについて差異があると考えられる。つまり、小説を研究題材として導き出された様々な、解析結果が、果たして本当に日本語教育にフィードバックされえるのかという問題があるのである。ゆえに本研究では、学習者が普段使用する教材に近いものを分析し、主題の省略・非省略をあらためて再考する必要があると考えるのである。すなわち、不特定で多数の人に語る場面(例えば作文も)となれば、その選択肢が少なくなり、自分のことを言及する時は一人称代名詞の「私」に限ら

れるであろうから、本稿は「私」のみを扱うために、新聞の読者投稿欄を分析の対象とする。

以上の問題関心から、これまでの主題研究において、その省略性の重点が置かれていたことを鑑み、本研究は、新聞の読者投稿欄を分析の資料とし、主題の機能をもつ一人称代名詞の「非省略」を分析することを試みるのである。

## 2. 文連続における主題の省略と非省略

### 2.1 叙述の類型

益岡（1987：20-21）は、叙述を「現実世界を対象として或るひとまとまりの事柄を概念化することであるが、そのあり方を反省してみると、性格を異にする2つの基本的な類型を認めることができる」と定義し、その類型を「属性叙述」と「事象叙述」の二つに区別した。そして、それぞれを「属性叙述文」、「事象叙述文」と名づけた。両タイプの違いを簡単に要約すると以下の通りである。

属性叙述文：現実世界に属する具体的・抽象的実在物を対象として取り上げ、それが有する何らかの属性を述べる文。典型的には、名詞述語文（出来事や静的事態除外）、形容詞述語文（感情形容詞除外）、動詞述語文（所有・能力・関係を表すもの）などがあげられる。

事象叙述文：現実世界の或る時空間に現実・存在する事象（出来事や静的事態）を叙述する文。典型的には動詞述語文・感情形容詞述語文、そして事象を表す名詞述語文などがあげられる。

### 2.2 叙述の類型と主題の省略

清水（1995）は、前述の益岡（1987）の叙述の類型に依拠しつつ、文連続の類型を基に文連続の分類を試みた。すなわち、益岡の言う「属性叙述文」と「事象叙述文」とが、二文を構成する場合、すべての組み合わせは全四通りある。そして、それぞれの特徴にそって、「叙事型」、「解説型」、「[叙事⇒解説]型」と分類し、各々における主題の省略性について分析し<sup>2)</sup>、清水（1995）は以下の法則性を主張した。

「叙事型」文連続

(A) 属性叙述文⇒事象叙述文：主題省略

(B) 事象叙述文⇒事象叙述文：主題省略

「解説型」文連続

(C) 属性叙述文⇒属性叙述文：主題顕現／主題省略

「[叙事⇒解説]型」文連続

(D I) 事象叙述文⇒属性叙述文：主題顕現

(D II) 事象叙述文⇒属性叙述文：主題省略（後行文が先行文への評価を下す場合）

本稿では、清水の「叙事型」文連続について検討してみたい。まず以下の3つの文例を見てもらいたい。

- (1) 私は 10年の歳月をかけて、ゆっくり卒業した気分である。φ<sup>1</sup>在学中は奨学金を借りていることがコンプレックスだった自分が、こんな穏やかな気持ちになれるとは思わなかった。  
『朝日新聞』（2003/01/05）
- (2) 私は男子校に通っているが、共学化には反対だ。φ別学校に在籍することで、異性とのコミュニケーション能力が下がったり、人格に問題が出たりするとは思えない。  
『朝日新聞』（2003/01/08）
- (3) 私は初めて英語の辞書を買ってもらった学生の頃を思い出す。φ見慣れぬ文字に何だか大人になったような気がした。φ覚えた単語に線を引いて、それが増えていき、辞書が次第に手あかで汚れていくのが何となくうれしかった。  
『朝日新聞』（2004/03/31）

(1) と (2) は、パターン (A) の「属性叙述文」⇒「事象叙述文」の文連続である。ゆえに、二つ目の文の主題は省略されたと考えられる。(3)は、(B) の「事象叙述文」⇒「事象叙述文」の文連続であり、ゆえにやはり、これも主題が省略されたと考えられる。

清水 (1995 : 651) によれば、「(A) と (B) の文連続が使用される環境はテキストの冒頭（導入）部、展開（維持）部という違いがあるがどちらも一つの事件や事柄が時間的、空間的に展開するという「叙事」（傍点筆者）を表すタイプのテキストに使用されるという共通点がある」とし、主題が非常に省略されやすいという。つまり、一つの事件や事柄が時空間的な流れに沿って展開する「叙事」を表す文であれば、主題が省略されやすいというのである。

しかし、あくまで「叙事型」文連続は、主題が省略されやすいだけであり、必ずしもすべてが省略されるわけではない。次のような主題が省略されていない例もある。

- (4) 私はかつてある事業所の面接で、年配の事務長から「君は県内の有名進学高校から聞いたこともないような大学へ入っとるが、高校では勉強を頑張らんかったんか」と尋ねられたことがある。その時、私は「そう言われると、確かに頑張らなかったと言えるかも知れない。でも実際、何をどの程度までやれば、頑張ったことになるのだろうか」と、心の中で禅問答のようなことを繰り返しながら憂うつな気持ちになった。

(4)は、「叙事型」文連続の文例である。そして、主題が省略されなかった文例でもある。清水の指摘する通り、実際「叙事型」文連続の文例には、主題を省略しているものが多い。しかし、省略されてない文例が取り上げられなかった。また、なぜすべてが省略されないのであろうか。この点については、清水ははっきりと説明していない。省略されない場合は、どのような理由があるのであろうか。

### 3. 先行研究と主題の非省略について

#### 3.1 主題の非省略

そもそも従来の研究では、主題の省略に関する研究が多く、主題の非省略に関するものが少なかった。さらに、主題の非省略の研究には、「使用すべき所なので、使用しているパターン」の研究と「使用しなくてもいいのに、使用しているパターン」の研究の二つに分けられるが、圧倒的に前者が多く、後者に関してはほとんど言及されてこなかった。本稿では、研究の蓄積が少ない後者に光を当てることを目標とするが、前者、後者の諸先行研究の両方にわたっていくつか大事なポイントがある。そこで、まず前者の先行研究も含め、大事な概念をおさえておきたい。

第1に、砂川の「時空間的ギャップ」の概念についてである。砂川(1990)は、第二文が、第一文の主題を維持することは困難な時、再び「は」を用いて主題を明示するという「主題の義務的な明示」の概念を提出した。別の言い方では、このことを、「は」の「主題の維持機能」と呼んでいる(砂川, 1990:22)。すなわち、同じ主題が、次の文で維持されることが困難な場合は、主題を再設定するというのである。そして、砂川(1990)は、「は」の「主題維持機能」が困難な場合について、そこに「時空間的なギャップ」が存在するという<sup>2</sup>。ここで、砂川の時空間的ギャップについて考えてみたい。

- (5) 玉枝は、遠縁の農家に一時身を寄せて、遼子を産むと、身体の回復を待つて福岡へ出て、職を求めた。

福岡では、<φは>器械部品を造る工場の社員寮の賄婦となり、遼子をつれて住込んだ。玉枝は中国ではずっと看護婦の仕事をしていたが、養成所を卒業する前から徴用されてしまったため、正式の免状を持っていなかった。

社員寮で<φは>中谷君雄と知り合った。

(砂川, 1990 : 27)

砂川(1990)は、「時空間的なギャップ」が存在すれば、主題が再設定される必要があるという。(5)では、「(a) 福岡へ出て職を求めたこと→(b) 福岡で社員寮の賄婦という

職を得たこと→(c)以前中国で職についていたこと→(d)福岡の社員寮で中谷君雄と知り合ったこと」という流れになっている。(c)以外は全部福岡での出来事であり、しかも、(a)昔→(b)昔→(c)遠い昔→(c)昔という、時間と空間との間にはっきりとした「ギャップ」が生じたため、再び主題が設定されたというのである。

前述の通り、清水は、一つの事件や事柄が時空間的な流れに沿って展開する「叙事」を表す文であれば、主題が省略されやすいと指摘していたが、砂川は、「時空間的なギャップ」が存在すれば、主題が省略されないという。すなわち、両者の見解は、共に時間的流れが止まらない場合、主題は省略されると判断しているのである。まずこの点を本稿ではおさえておきたい。

次に第2の点として、砂川は、「時空間的ギャップ」の論理は、「使用すべき所なので、使用しているパターン」の研究上での観点から導き出されたものであり、前述の后者の研究にあたる「使用しなくてもいいのに、使用しているパターン」の研究には当てはまらないものであるということをおきたい。これに関して、砂川(1990)は、日本語では、復元が可能な主題は、省略が可能であるという。そして、復元できない主題が、義務的に明示されなければならないのに対して、復元可能な主題の場合、その主題の省略は、全く義務的なものではない。すなわち、省略するかしないかは、あくまで書き手の自由な選択に委ねられているというのである(1990:23)。つまり、書き手側が、主題を使用しなくても良い場合であったものの、たまたま使用することもあり、そこには書き手側の勝手な選択によって顕現されているというのである。そこには、主題が顕現する学問的根拠は存在しないというのである。それは真実であろうか。書き手の自由な選択に委ねられていると片付けられるのだろうか。

### 3.2 「叙事型」文連続の主題の顕現

再度、(4)の文例を見てほしい。(4)は二つの出来事を述べる文が繋がっている例である。これは、「叙事型」文連続の中の「事象叙述文⇒事象叙述文」というパターンとして考えられる。しかし、二番目の「私は」が省略されてない。つまり、顕現しているのである。

(4)の冒頭には、「かつて事務長から(中略)と尋ねられたことがある」という文の中、「かつて」という時間を表す副詞があったため、この文は昔のことを述べているのが分かる。二番目の後行文のは、「その時」が導入されたことによって、昔のことと考えられる。

(4)の時間の流れを見ると、両方とも昔のことであり、かつ一定の流れで展開され、時空間的ギャップもない。そうになると、清水、砂川の論理によれば、主題が省略されるはずであるが、ここでは省略されてない。なぜなのであろうか。他の文例も見てみよう。

- (6) 経理関係の仕事を希望しているが、いまだ採用される気配はない。20代の若手を募集している割には、どの会社でも経験不足を理由に落とされてきた。確かに私

は事務経験はなく、あるのは今のアルバイトでやっている販売と接客経験ぐらいだ。販売系の仕事に就職するなら有利かもしれないが、やはり経理の仕事に従事したいという希望をあきらめるわけにはいかない。

私は小学生時代から母のすすめで珠算塾に通い、商業高校卒業まで続けた。その後、スペシャリストになりたいと思い、ビジネス系の専門学校へ進学した。これだけこだわって勉強してきたからには、なにがなんでも経理の仕事に就きたいし、将来、より専門的な仕事にかかわりたいという夢を実現させるべきだと考えている。

『朝日新聞』(2005/3/24)

(6) の一番目と二番目の「私は」は、両方とも省略されずに顕現しているものである。しかし、この二つの「私は」は文脈の推論によって省略してもよいであろう。また、(4) も同じよう、時空間のギャップがないにもかかわらず、主題が顕現した。なぜ非省略されなかったかについて他の例を取り上げながら考えてみる。

(7) 僕は何よりも、助かった、と思った。勝っちゃんの言うとおりに、いま家じゅうがそのことでゴッタ返しているのなら、僕は帰りが遅れたことを誰にも気づかれずにすむからだ。

(砂川、1990 : 23)

(7) は、二つ目の主題を省略したとしても、談話の自然さはまったく損なわずにすむ。砂川(1990)は、主題の使用をしなくてもいいのに、使用されているものを、「主題の非省略」と名づけ、その主題の省略は、全く義務的なものではなく、省略するかしないかは、あくまで書き手の自由な選択に委ねられていると主張したことはすでに述べた。確かに、砂川は、書き手側が、その談話になんらかの境界を設け、その談話をより小さな単位に分割することにより、談話をより小さい単位に分割し、その結果、文章の流れを息の短いものにしてそこに一定のリズムを与え、ある種の表現効果を生むことができるとし、そこから主題が非省略される一定の根拠を指摘しているが、しかしあくまでいずれにしても、主題の再設定するか、しないかはあくまで書き手の自由に委ねられているという(砂川1990 : 23)。

では、(4) (6)、および次の例をみてみよう。

(8) 介護保険を利用してヘルパーを頼むことも可能だ。だが、妻は他人が夜間に家に入ることを嫌い、「2人の今の時間を大切にしたい。あなたのために悔いのない、精いっぱい介護をしたい」と言ってくれる。

深刻な肺炎になって延命を望む場合、人工呼吸器をつけ、胃に穴を開けて栄養をとる必要に迫られる。妻だけでなく多くの人に助けられて生きることになる。

そのとき、どのような選択をするにしろ、私たち夫婦だけに残された時間は限られている。私は今、妻の献身に甘えて、2人の生活をできる限り楽しむことにしている。

『朝日新聞』(2004/10/26)

- (9) 今年は台風の襲来が続き、我が家でも裏山の木々が数本倒れる被害に遭った。(中略) 中でも最大の被害は、直径 60 センチはあろうか、根の大きさは四畳半ぐらいの樫(かし)の大木である。ひと目で素人では処理できないと判断して、近所の大工さんに伐採をお願いすることになった。

夫の入院中、台風 23 号がやってきた。私は毎日の病院通いですっかり樫の大木のことを忘れていたが、台風一過の土曜日、大工さんがやってきた。

「倒れた樫の木はどこですか」と質問に、私はとっさに「誰かが持って行ってしまったのだろう」と思い、長靴を履いて飛び出した。

『朝日新聞』(2004/10/29)

- (10) 入れ歯に限らず、眼鏡や補聴器、義足などの医療補助具には優れたものがある。普段気にせず地使用していて、たまたま忘れたり、壊れたりして修理に出し、不便さを感じてい人もいるだろう。

便利さに慣れきって不便さを忘れてはいけない。私は今日も入れ歯の手入れをしながら、他人の目には薄汚いこの入れ歯がいとおしくてならない。

『朝日新聞』(2005/03/31)

- (11) 年々、高齢ドライバーの交通事故が増え続けているという。私は3年前に家族の薦めもあって免許証を返納し、自転車一筋の生活に入った。

(中略)

傘寿を過ぎると視力が落ちてきた。私は今年白内障の手術をして少々回復したが、眼鏡をかけても視力は0・5止まりだ。聴力など五感は総じて衰えてきた気がする。

『朝日新聞』(2004/10/26)

(4) (6) (8) (9) (10) (11) などの例を読んで、下線部「私は」は省略してもおかしくない文と考えてもよい。これらの文例を分析すると、一つ共通点があげられる。それは、「時間副詞」を伴っている「私は」の文は、主題が顕現しやすいという点である。これまでの諸研究では、砂川に代表されるように、使用しなくてもいい場合に主題を使用するのは、書き手の判断に任されているとされてきたが、様々な文例を分析した結果、「時間副詞」を伴った際に、主題が顕現されるという特徴が見つかった。

(4) の二番目に用いられた「私は」の前に、「その時」という時期(タイミング)を

表す副詞がある。そして(8)の「私は」の後ろに、名詞でもあり、副詞的にも用いられる「今」がある。また、(9)では、一番目の「私は」の後ろに「毎日」という副詞も使用されている。(10)は「私は」の直後に「今日も」という時間副詞が使用されている。そして、最後の(11)は、二つの「私は」の直後にすぐ3年前と今年などの時間副詞が併用される例である<sup>3</sup>。

### 3.3 考察

確かに、日本語では、元々、一人称代名詞は文章の中でも、原則として提示しなくてもよいと考えられている。つまり、日本語では一人称代名詞は、省略される傾向があるということである。

しかし、今回、新聞の読者投稿500編を資料として分析した結果、清水の分類で言うところの「叙事型」で、かつ「私は」が顕現される例は160個が見つかった。そして、その中に、「時間副詞」を伴って顕現された「私は」の事例は、41例あった。これは、全体の約四分の一を占めている計算になる。全体の25%をも占める「時間副詞」を考察すれば、既存の研究で謳われてきた、書き手側の自由な判断に、主題の省略非省略が本当に委ねられているのか疑わしいといえる。

しかし、ではなぜ「時間副詞」を伴うと「私は」が顕現しやすいのだろうか。これについては、「時間の非連続性」を指摘しておきたい。この「時間の非連続性」は、ここでは「物語のイベント・行為・状態が、直前の文脈とは異なる物語領域において生じる時」と定義づけておくが、すなわち、時間の連続、乃至は非連続の判断は、テンスやアスペクトなどに頼るところが大きいのが、必ずしもテンスとアスペクトで判断できるとはいえないのである。日本語における一人称代名詞がよく省略されるといわれているが、非省略する場合においては、必ずなんらかの理由があると考えねばならない。今回の新聞投稿欄の分析を通じ、省略してもよい「私は」の顕現は、時間副詞の使用を伴っている特徴を発見したが、これが一つのヒントになっているのではないだろうかと考えている<sup>4</sup>。

### 4. まとめと今後の課題

主題の非省略に関する研究が少なかったため、今回は、主題の機能をもつ一人称代名詞意を分析することを試みた。今回は、清水(1995)『文連続において反復主題が省略される場合と省略されない場合との違いには文の「叙述の類型」の異なりが関係している』という考えを土台にし、「叙事型」における一人称代名詞「私は」を取り上げ、それらの非省略の理由を省察してきた。

従来、主題の「省略してもよいのに、省略されない」理由としては、あくまでも書き手に委ねられるというふうに考えられてきた。しかし、今回の研究の結果、すべてが書き手に委ねられるというより、「私は」と伴って使用される時間副詞が、主題の顕現と関わりが



あるのではないかと考えるに至った。時間の非連続が生じたため、反復主題が再び使用されやすいという説を付け加えることができた。しかし、今回の分析した結果における時間副詞と「私は」の使用はあくまで全体例の四分の一を占めているが、ほかの四分の三では、なぜ「私は」が省略されなかったのだろうか。ここでは紙面の関係上これ以上議論することはできないが、おそらく時間副詞以外の理由が存在し、そしてそう多くない理由によって、主題が顕現されると思われる。いずれにしても、そのいくつかある顕現の学問的根拠について、時間副詞の伴いも含め、さらなる研究が必要と思われる。さらに出来得るならば、今後は、文の性質や、書き手の表現意図・目的なども考慮をいれ、さらに多面的に分析していきたい。

---

## 注

- 1 先行文と同一主題を示し、主題が省略可能という記号。
- 2 砂川は、他に、「他の登場人物の介在」、「脈略の不整合」、「語り様式の変化」、「視点の変化」の存在も理由に挙げている。
- 3 ただし、(6)の一番目の「私は」は時間副詞との伴いの形で現れなかったが、先行文と後行文の間に、昔の出来事から今の現実という流れがあるため、時間副詞がなくても時間の転換をテンスで分かるであろう。つまり、(a)の20代の若手を募集して割には、どの会社でも経験不足を理由に落とされてきた。⇒(b)確かに私は事務経験はなく、あるのは今のアルバイトでやっている販売と接客経験ぐらいだ。(a)は昔の自分の経験を述べ、その時制過去形であるが、(b)は今の自分の経験を述べ、時制が現在形である。この点を見ると、(a)と(b)の間に時間の展開があると判断できる。
- 4 また、「私は今」という「私は」+「今」(時間副詞)は、一種の決まり文句として使用されており、義務的な明示というより、普遍化に使用されているのではないかと考えられる。

## 出典

『朝日新聞』

## 参考文献

- 恵谷容子(2002)「説明文と随筆の文章における主題の省略」『早稲田日本語教育研究』創刊号、101-115
- 甲斐ますみ(1993)「談話における発話の解釈—省略という現象をめぐって—」『東呉日本語教育』16、173-191
- (1995)「省略のメカニズム—談話の構造と関連性および聞き手の推論を中心に—」『岡山留学生センター紀要』3、1-18
- 久野暉(1978)『談話の文法』、大修館
- 清水佳子(1995)「「NPハ」と「 $\phi$ (NPハ)」」『日本語類義表現の文法(下)複文・連文編』くろしお出版
- (1995)「主題の省略と顕現から見た文連鎖の型—文類型との相関という観点からの考察」『待兼山論叢』29、17-30
- 砂川有里子(1990)「主題の省略と非省略」『文芸言語研究 言語篇』18、15-34
- 寺倉弘子(1986)「談話における主題の省略について」『月刊言語』15(2)、99-105

- 
- 益岡隆志（1987）『命題の文法』くろしお出版  
三上章（1960）『象は鼻が長い』くろしお出版  
村上京子（1996）「『わたし』の使用過多について」『日本語研修コース修了生追跡調査報告書』2、129-136  
島弘巳（1980）「文とは何か—主題の省略とその働き」、『日本語教育』41、198-208